

# 子どもを勇気づける教師

上越教育大学教職大学院准教授

あかさか しんじ  
赤坂真二

## 溢れる勇気くじき

「うぜえ」「ハア？ ダメじゃん」「お前、一度死んでこい」。子どもたちと接していると日常的にこうした言葉に出会う。文字にすると「ナント殺伐としてることか」と嘆きたくなるが、子どもたちは実に明るい表情でこうした言葉を交わし合っている。ならば、よしとしていいだろうか。いや、だからこそ問題なのである。このような言葉を交わし合っている者同士が、アツケラカンとしている。すると、周囲は問題として認識しないことがある。その日は、沈んだ様子もなかったのに、次の日、学校に行けなくなってしまうたな

んてことが起こる。言葉のダメーじは、言われた者の心を静かに蝕んでいく。今の子どもたちは、自分の発する言葉に鈍感で、自分に向けられる言葉には敏感なのだ。

文部科学省の調査<sup>1)</sup>によると、最も多いいじめの手段は「冷やかしゃからかい」で、小学校で四割以上、中学、高校で約五割を占める。「言葉による脅し」は、各校種で二割から三割を占める。合計すると七、八割である。前者には、いくらかジエスチャーや表情などによるものも含まれるだろうが、現在、子どもたちの間で起こっている侵害行為のほとんどは、言葉を媒介にして起こっていると思われる。調査を引き合いに出すまでもなく、「今、子どもの言葉が危ない」という

のは、教育関係者の共通の認識ではないだろうか。

みなさんは子どもたちが目にする、漫画やアニメをご覧になったことがあるだろうか。もちろん、すべてがそうだとはいわないが、かなり「キツイ」表現が溢れている。また、一〇代の平均視聴時間が二時間とも三時間とも言われる<sup>①</sup>。テレビから、侵害的な言語が日常的に提示されていることは、ご存じの通りである。親、きょうだい、周囲の人間関係のなかで耳に入る言葉が「荒れ」てきている現状を考えると、子どもは毎日相当なインパクトで侵害的な言語にさらされていると思われる。自分の発する言葉に鈍感になった子どもたちは、何か成功して喜んでる友だちに「それって、自慢?」と冷やかしたり、何かアイデアを提案した友だちを「あつ、ムリ」と一刀両断に拒否する。特別に感情的になつたりけんかをしたりしなくても、日常的に「勇気くじき」をするのである。

## 教室を勇気づけ空間にする

日常的に勇気くじきが行われている教室では、子どもたちが無邪気に笑ったり、喜びを露わにしなくなる。

表情が暗くあいさつや返事に元気がない。学習中に発言するのは、ごく一部の限られた子どもで、自発的な提案などほとんど起こらない。深刻ないじめなどないのに、教室にまったく覇気がない。このような教室では、子どもたちが自分たちの能力を発揮することはできないだろう。

侵害的なコミュニケーションスタイルを身に付け、それを当たり前だと思っている子どもたちを勇気づけ合うようにすることは容易ではない。勇気づけ合うことは素敵なことだと気づかせ、勇気づける方法を地道に教えていくことが必要だ。子どもたちは、生活レベルで圧倒的なインパクトで勇気くじきの方法を学んでいる。だから、まず、教室を勇気づけの空間にする。教室で勇気づけの言葉や行為に日常的に触れさせ、体験させるのである。しかし、勇気づけは、インパクトでは勇気くじきにはかなわない。人は「痛み」にまず、反応するからだ。だから、じつくりとじつくりと、あらゆる教室における営みで訴えていく。私の取り組みは次の三つの方向で実行されている。

- ① 教師から子どもへの勇気づけ
- ② 子ども同士の勇気づけ合う関係づくり
- ③ 保護者への勇気づけ

以下に、具体的な実践の一端を示す。

## 教師から子どもへの勇気づけ

教師の言葉かけや態度が勇気をくじくものであつては、子ども同士に勇気づけ合う関係はできない。子どもにも勇気づけを教えたかつたら、まず、教師がモデルになることである。勇気づけの定義や技法は、アドラー心理学関係の書籍に優れた解説があるので、そちらをご覧いただきたい。ここで示すのは、「私なり」の勇気づけである。

私は、勇気づけは「あるもの探し」であると思つてゐる。勇気づける側が、対象のもつてゐる力やよさに注目して、言葉や態度でそれに気づかせる。そして、対象が、自分を信じていることができたり自分のことを大事に思うことができるようにする。そのときに、必要なのは「対等性の自覚」である。教師が役割は違えど

も子どもと人として対等だと自覚できたら自ずと言葉がけが違ってくるだろう。何か適切な行動を目にしたら「偉いな」と言うより「ありがとう」と言うだろう。子どもが困つていたら「先生に任せておけ」と言うより「何か、先生にできることある？」と尋ねるだろう。

私の学級に、発言がとても苦手なA子さん(小三)がいた。意見を言おうとすると涙ぐんだり、何も言えなくなつてしまつたりする。低学年のころからそうだったという。お母さんも「うちの子、話せないんですよ」と懇談会で話していた。それでも、私は、学習中も遠慮なく彼女を指名した。彼女が口ごもると周りの子が気を利かせて「ほら、がんばつて」と言う。彼女の大きな目には大粒の涙が浮かんでいた。確かに、彼女は、言わないことで優しい声かけをしてもらつてゐた。だが、必死に言おうとしてゐるA子さんの姿は、「不適切な行動に注目されている状態」と呼ぶには切なすぎた。ただ、ここで「言わなくていいよ」と言うのと、彼女は言わないことで得をしたことになる。無理矢理言わせるのも不必要な注目を与えることになる。それよりも、発言できなくて申し訳なく思つてゐる彼女を安心させる必要があると考えた。そこで、「言お

うとしてくれたのが先生は嬉しい」とA子さんに声をかけて、次は、全員に向かつて言った。「A子さんは、発言が苦手かもしれないけど、話を聞くことはとても上手にできる。みんな、それは知っているでしょ」とすると、いつも発言場面でこわばった表情をしていた彼女が、ちよつと安心した顔をした。

このことをきっかけにして、子どもたちがときどき彼女のことを日記に書くようになった。「今日、A子さんが、授業中に発言しようとしていた。言えなくてもがんばっているからスゴイと思う」「今日、A子ちゃんが発言した。A子ちゃんは、がんばりのプロだ」などの記述があると、たまに読んで聞かせた。A子さんを認めるためではない。A子さんの努力を認めた子どもたちを勇気づけるためである。それからすぐにはないが、彼女は、指名されれば発言ができるようになった。もちろん、涙ぐむことはなくなった。

担任が、長所や努力に注目することを、具体的な行動で示す。すると、何人かの子どもが真似る。それをまた、認めて勇気づける。すると、さらに真似る人数が増える。それを繰り返して、勇気づけの言動を教室に広めていく。

## 子ども同士の勇気づけ

教師の勇気づけの言動をモデルとして子ども同士に勇気づけが起る。しかし、それを広めていくだけでは弱いし、継続されない。一斉指導や勇気づけのシステム化により、勇気づけの日常化を図る。

### (1) 「つながり」の授業

学級開きや学期の始まりに実施する。「これから一年間、このメンバーで過ごしていきますが、人と人が付き合う上で一番大事なことはなんでしょうかと問う。子どもたちは、「思いやり」「優しさ」「けんかしないこと」などと言う。そこで、「それは、尊敬の心です」と伝える。意味がわからない子どももいる。それでいい。「尊敬って何？」と質問が出たら、なお、好都合。「尊敬って一体何をするのでしょうか」とさらに問う。子どもは「え？」という顔をする。「尊敬」の意味がわかる子どもほど混乱する。そこで、「まず、あいさつをすることです」と言う。ここで、普通にあいさつを交わし合っても何の面白みもない

で、ゲームをする。「指と指をくつつけて『アウチー』と叫びましょう。五人の人とやります」のように。これを、拳と拳を合わせて「よろしグー」としたり、「ハーイ」と声を出しながらハイタッチしたりして、できるだけ多くの人と触れ合えるようにする。終わったら「尊敬の気持ちの示し方は、あいさつだけではありません。これからみんな考えていきましょう。一年間よろしくお願いします」と言つて終える。楽しみつつも、教師の伝えたいことをしっかりと伝えることが出来る。

## (2) 「ふわふわ言葉」の授業<sup>③</sup>

出会いで人と人とのつながりの基本を伝えた。次は、言葉には力があることを知らせる。次の週の道德の時間などを使う。

「人に言われて元気をなくしたり、傷ついたりした言葉があるでしょう。どんなことを言われましたか」と問う。できたら全員に一言ずつ言わせたい。全員で授業をしていることを示したいからである。子どもは「うざい」「キモい」「消えろ」など、定番とも言える侵害的な言葉を挙げる。それを黒板にひとつひとつ書

いていく。一回りしたところで、全員で読み上げる。読んだ感想を聞くと、「イヤな気持ちがあった」「気分が暗くなつた」などと言う。次に「こういう言葉を『チクチク言葉』と言います。でも、逆に、人に言われて元気になったり、嬉しくなる言葉もあるよね、それを『ふわふわ言葉』と言います。どんな『ふわふわ言葉』を言われたことがありますか」と聞く。すると「ありがとう」「一緒にやろう」「遊ぼう」などが挙げられる。読ませると、子どもたちは嬉しそうに声を出し、「気持ちよくなつた」「嬉しくなつた」などの感想を言う。この後で、「チクチク言葉」が溢れたら、「ふわふわ言葉」が溢れたら学級はどうなるか考えさせる。子どもは「ふわふわ言葉」が増えることを願う。「ふわふわ言葉」が溢れる学級にしようね」と締めくくる。このほかにも、ふわふわ言葉を交わし合う「言われたい言葉」の授業や、嬉しいときや悲しいときの言葉かけを考える「共感の授業」などの勇気づけの授業を一月に一時間程度実施しながら、勇気づけについて考えたり体験したりする機会をもつ。

### (3) クラス会議

こうした授業のほかに、私の学級ではクラス会議を行う。子どもたちが、学級の生活上の諸問題を解決したり、個人の問題をみんなで解決したりする。たとえば、「給食をもらう順番待ちのときに割り込まれて困った」との議題が出される。話し合っているうちに、多くの子どもが同じ問題で困っていることがわかった。割り込みを許すとその子どもは喜ぶが、後ろに並んでいる多くの子どもが嫌な思いをしていることがわかったり、そうしたことはその場で「ダメだよ」と声をかければいいことに気づいたりする。ここでは、子どもたちが授業等で身につけた勇気づけの技術や態度が発揮されることとなる。勇気づけの授業群とクラス会議は常に相互に補完しながら子どもたちに勇気づけ合う関係をつくっていく。

## 保護者への勇気づけ

女子の間でトラブルがあった。B美さんのお母さんは、娘が友だちを傷つけたことを信じようとしなかった。事実とわかっていても、自分の娘をかばおうとしてい

た。B美さんのしたことで、お母さん自身が傷ついたのでろうと思った。そこで、「お母さんは、親として十二分にやっていらつしやると思いますよ。大人がどんなにがんばったって、つまずくのが子どもだと思いません。今が、B美さんを育てるチャンスなんだと思います。一番大好きなお母さんの言葉は、きつとB美さんのところに届くと思いますよ」と最後に言った。

B美さんは、その後も何度かトラブルを起こした。そのたびに「B美さんは悪い子ではない、間違っただけだ」と伝えた。「行為と行為者」を区別するように話した。学年の終わりにお母さんから「いつも娘のことを一番に考えてくれてありがたかった」とメッセージをいただいた。

保護者や子どもとの関係づくりがきわめて難しい時代とも言われるが、教師、子ども、保護者がお互いに勇気を与え合う関係になることで、間違いなく、子どもは伸び伸びと自分の能力を発揮するようになる。勇気をもちにくい世の中だからこそ、教師は、「勇気の伝道師」としての役割を自覚していただきたいものである。

〔参考資料・文献〕

(1) 文部科学省ホームページ「平成十七年度生徒指導上の諸問題の現状について」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/18/09/06091103.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/09/06091103.htm))

(2) 「二〇〇五年国民生活時間調査」NHK放送文化研究所

(3) 手塚郁恵「シリーズ〈育てる〉学校カウンセリング③ 好ましい人間関係を育てるカウンセリング」学事出版、一九九八